



1. 年頭のごあいさつ



公益社団法人
茨城県農林振興公社
理事長 藍原伸夫

新年あけましておめでとうございます。

皆様方におかれましては、健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

また、旧年中は当公社の事業運営に格別のご理解ご尽力を賜り、厚く御礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、様々な出来事を通して地球規模での気候変動が加速していることを実感させられる一年がありました。

なかでも気温の上昇は一段と激しく、梅雨入り前後から急速に30度を超える、その後も記録的な猛暑が9月中旬頃まで続きました。高温アラートや熱中症対策の呼びかけが連日報道されるなど、長期にわたり人命にかかわるほどの厳しい暑さに見舞われました。

また、各地で線状降水帯による大規模な豪雨災害が頻発し、特に九州地方の熊本・福岡・鹿児島では、短時間に集中した大雨が複数回発生したことで、より深刻な被害をもたらしました。この現象は首都圏の都心部においても交通マヒを招く事態となるなど、全国的に生活や経済活動に大きな影響を及ぼしました。

こうした未曾有の気象要因が重なり、農作物の生産や流通にも支障を来たしました。熊本を主産地とするトマトが、生育障害に被災が相まって「ト

マトショック」と称される価格高騰を引き起こしたのは顕著な例であります。

さらに、年の後半には山間部にとどまっていた野生の熊が居住地域に出没し、人身被害も相次ぎ、喫緊の社会問題となるなど、生態系全体の変化を肌で感じるとともに、自然環境の変動が私たちの暮らしに直結していると、改めて深く考えさせられました。

このような中、農業情勢に目を向けてみると、一昨年来の主食用米の取引価格は依然として高止まりの状態にあります。概して不均衡な需給バランスによるものと評されていますが、なお不透明な本質的要因を解明したうえで、生産・消費それぞれの立場から適正価格の水準やその実現に向けた抜本的な対策について、早期の議論収斂が望まれます。

当公社といたしましては、行政施策に即して茨城農林業の成長産業化に資する各種事業を展開しているところであります。なかでも穀物改良事業における優良種子の安定供給は重要な責務であると認識しております。先述のとおり農業経営を取り巻く情勢変化の予測が難しい局面にあって、引き続きその役割をしっかりと果たすべく、これまで以上に中長期的視点に立って本県の米をはじめ麦・大豆・そばの需要動向を的確に把握し、適切に対応してまいります。

結びに、事業目標の達成に向け、なお一層の努力を重ねてまいりますので、関係各位の変わらぬご支援とご協力をお願い申し上げますとともに、皆様方の益々のご発展とご健勝を祈念し、年頭のごあいさつといたします。

くじ

1. 年頭のごあいさつ	1
2. 茨城県における「常陸秋そば」の生産について	2
3. 水田難防除雑草ナガエツルノゲイトウに有効な除草剤による本田および夏季畦畔防除	4
4. JAグループ「共同購入」の取り組みについて	6
5. がんばる種子生産者！（JA常陸太田地区種子生産部会）	7
6. 穀物改良部ニュース	8
(1) 令和7年産水陸稻種子審査・検査標準見本品作製会を開催	
(2) 令和8年播種用麦類種子生産委託計画を承認	
(3) 令和7年産水稻種子調製技術検討会を開催	

2. 茨城県における「常陸秋そば」の生産について

茨城県農業総合センター 主任専門技術指導員 寺 門 ゆかり

1 はじめに

茨城県におけるそばは、担い手への農地集積・集約が進む中、水田輪作体系における戦略作物として、麦類や大豆に次ぐ重要な土地利用型作物となっています。また、本県は古くから続く全国有数のそば産地でもあるため、重要な観光資源にもなっています（写真1、写真2）。また、昭和60年度から奨励品種として生産振興を図っている、本県育成品種の「常陸秋そば」は、大粒で粒揃いがよく風味に優れることから、実需者の高い評価を維持しています。

一方で、本県産そばは国内主産地の作柄による価格変動幅が非常に大きく、その多くが水田で栽培されているため、湿害や台風による倒伏等生産が不安定になります。加えて、近年は気候変動に伴う高温障害や害虫被害の増加、難防除雑草の多発等による大幅な減収も見られており、経営の安定化が喫緊の課題となっています。



写真1 大規模経営体による汎用コンバインでのそば収穫（桜川市）

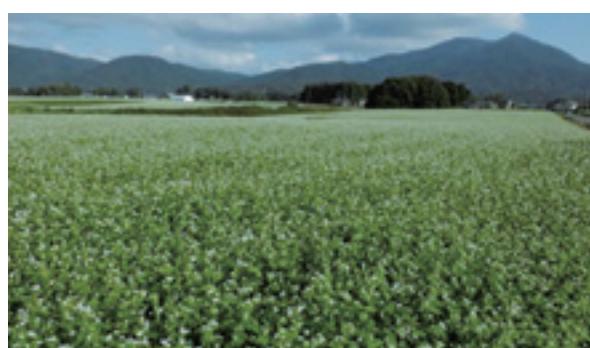


写真2 名峰筑波山の麓に広がる「常陸秋そば」の畑

2 県内の主要なそば産地の現状について

(1) 県北地域等における地域特性を活かした付加価値の高い小規模栽培

県北山間部の小規模畠地帯では、狭小なほ場や接道条件の悪さに加えて、段差や傾斜のある畠も多いことから、農地の集約や合筆による大区画化、基盤整備による排水改善等が進まず、機械化栽培体系がなかなか普及できないため、高齢化する生産者や産地にとって大きな課題となっています。一方で、黒化率が低く緑みを残した状態で実施できる手刈り収穫や、島立てや地干し等による時間をかけた天日乾燥など、昔ながらのていねいな手作業による生産体系が残されています（写真3、写真4）。これら手間のかかる作業の積み重ねが、全国的に高評価を受ける風味豊かな「常陸秋そば」の生産を可能にしているとも言えます。

また近年では、県や市町が連携して支援する新たな動きとして、有機10割そばを売りにした直営そば店を出口とした異業種法人の参入や、耕作放棄地を活用した有機JAS認証取得を目指す県外農業法人の参入等も始まっています。技術的な課題は多々ありますが、さらなる付加価値を持つ「常陸秋そば」生産に向けて期待が高まります。



写真3 手刈り収穫されるオーナー制ほ場（常陸太田市）



写真4 ほ場に島立てされた乾燥中のそば（常陸太田市）

(2) 県央・県南・県西地域等における収益性の高い大規模機械化栽培

県央・県南・県西地域の平坦かつ広大な畑地や水田転換畑では、担い手への農地の集積・集約が進んだこともあり、スマート農機や大型機械をフル活用した収益性の高いそば生産が行われています（写真5）。高齢化が進み生産者数・作付面積共に減少を続ける県北山間地域とは対照的に、県南・県西地域における水田輪作を主とした大規模経営体によるそばの作付面積は緩やかに増加を続け、県内全体のそば作付面積は令和5年産で3,590haと、10年で約1.2倍に増加しています（図1）。



写真5 乗用型ハイクリブームによる薬剤散布風景
(桜川市)



図1 茨城県におけるそば作付面積の推移
(平成25年～令和5年産、農林水産省 作物統計調査より)

3 県産「常陸秋そば」の安定生産を脅かしつつある新たな課題

(1) 難防除雑草である帰化アサガオ類の発生

同じ広葉の夏畑作物である大豆と同様に、難防除雑草である帰化アサガオ類の発生が県内そばほ場においても問題となってきています（写真6）。

そばはマイナー作物に位置付けられていることに加え、除草剤による薬害が出やすいタデ科の植物であるため、大豆のようなアサガオ類に効果的な除草剤の登録がありません。また、機械化栽培体系が前提の大規模そば産地では、労力のかかる中耕培土や手取り除草が困難となっているため、一度侵入を許すとあっという間に発生密度が高まり、大幅な減収や収穫放棄となりかねません。なお、アサガオ類の種子はそばの子実と似たような形状と大きさであるため、慣行の調製だけでは混入のリスクもあります。アサガオ類の発生がひどい場合には、ほ場の刈り分けや区分出荷と共に、休耕を含めた耕種的対策の検討が必要になります。



写真6 そばほ場に発生した帰化アサガオ類
(常陸太田市)



写真7 高温による開花継続で成熟遅延がみられるそば (令和5年、筑西市)

(2) 夏季高温の影響による開花継続と成熟遅延等による収量品質の低下

県内主産地である県西地域では、8月中旬～下旬に播種した「常陸秋そば」は、例年9月中旬には開花盛期を迎えるが、10月下旬頃になると一気に黒化率が高まると共に水分が低下し、降霜前には収穫を終える栽培体系を主としてきました。

ところが近年、開花期間にあたる夏季の異常な高温に加えて厳しい残暑が長く続くことで、最も結実するはずの頂花房だけでなく、分枝や下部の花を含めてもほとんど結実せずに開花が続く、「開花継続と成熟遅延」が観察されています（写真7）。収量品質の低下に加えて、後作である麦類の播種作業が遅れる等水田経営全体への影響も懸念されています。

そのため、あらかじめ高温の影響を踏まえて播種時期を慣行よりやや遅らせることで、徒長や過繁茂を避けると共に開花盛期をずらし、成熟遅延が発生した際には、高水分で無理に収穫せずに可能な限り収穫を遅らせることで減収程度を抑えることが有効です。

3. 水田難防除雑草ナガエツルノゲイトウに有効な除草剤による本田および夏季畦畔防除

茨城県農業総合センター農業研究所 作物研究室 大橋俊子

1. ナガエツルノゲイトウとは

ナガエツルノゲイトウ（以下、ナガエ）は、南米原産のヒュ科多年生雑草で、日本では特定外来生物に指定されています（写真1）。本種は生命力が極めて強く、切断されても節や根茎から盛んに発根・萌芽して分枝、増殖するため、防除が非常に困難な草種です。水田内で多発すると収穫作業阻害を引き起こします。茨城県においては、2020年に新利根川流域を水源とする水田への侵入を確認しており、発生面積は年を追うごとに拡大しています。



写真1 ナガエツルノゲイトウ

茨城県農業総合センター農業研究所では、2023年度からナガエの防除対策を目的として試験課題を立ち上げ、現在取り組んでおります。本稿では、2023年度及び2024年度に主要成果として取りまとめた、水田内のナガエに有効な除草体系及び夏季水田畦畔に発生するナガエに対する除草剤の除草期間についてご紹介します。

2. 茨城県の水田におけるナガエの生態

茨城県県南地域の水田では、3月下旬頃からナガエの出芽が見られます。春先の気温上昇とともに地上部が旺盛に生育し、4月には畦畔に発生した茎が水田内に侵入し始めます。代かき作業に伴

い、水田内に発生・侵入した茎は切断され土中に埋め込まれますが、切断茎の節から発根・萌芽して再生します。夏季は主に地上部（葉や茎）が旺盛に生育し、徐々に地下部（根）に栄養をため込んで、降霜の頃には地上部が枯れて地下部で越冬します。国内では、種子による繁殖は認められていません。

3. 水田内のナガエに有効な除草体系

水田内に発生したナガエは、有効な除草剤の体系処理により防除が可能です。代かき作業で切断され、土中に埋め込まれたナガエの切断茎の節からは、埋め込み後2～3日程度で新しい芽が出て、再生し始めます。再生した芽が5cm以下の時期（再生始期）に、初期剤または初中期一発剤を処理し、続いて、初期剤を使用した場合は水稻移植後20日頃に中後期剤を、初中期一発剤を使用した場合は水稻移植後40日頃に後期剤を処理します（表1）。有効な除草剤の体系処理により、水稻移植後70日目のナガエの残草量は無除草の場合に比べて3%以下と高い除草効果を得られます（表1、図1）。除草剤を使用する際は、ナガエの茎葉が水没するよう水深を確保した方が安定した除草効果を得られます。このため、冬季のうちに圃場を均平化しておくことも大切です。

表1 ナガエツルノゲイトウに有効な除草剤による体系防除の除草効果(2023年)

処理内容	除草剤名	処理時期 (水稻移植後 日数)	移植後70日目の ナガエツルノゲイトウ残草量		
			草丈 (無除草区比)	被度	地上部重 (無除草区比)
初期剤→ 中後期剤	ビラクロン1キロ粒剤→ ワイドコア1キロ粒剤	5/19→6/5 (+4→+21)	1.3cm	2%	15.7g (3%)
初中期一発剤 →後期剤	アツトウZ 1キロ粒剤→ ロイシント乳剤	5/19→6/26 (+4→+42)	1.0cm	<1%	0.4g (<1%)
無除草区	(クリンチャー 1キロ 粒剤)	5/28 (+13)	40.1cm	51%	622g

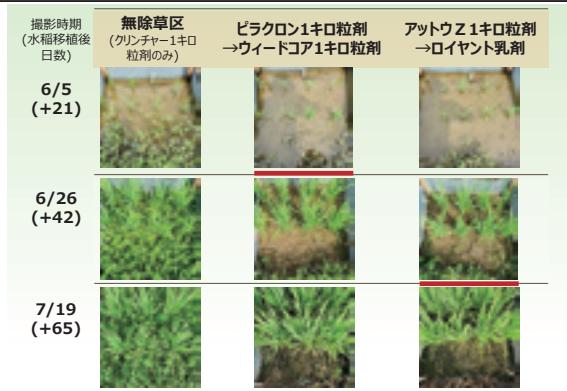


図1 ナガeturonogeitouに有効な除草剤による体系防除の除草効果(2023年)

※図中の除草剤は2025年11月12日現在、「移植水稻」に登録のある剤である。

※図中の赤字太線は体系処理を実施したタイミングを示す。

4. 夏季水田畦畔に発生するナガエに対する除草剤の除草期間

畦畔におけるナガエは、3月下旬頃から出芽し、6～8月頃に最も旺盛に生育します。水田畦畔に登録のある除草剤のうち、ラウンドアップマックスロードは散布後28日程度ナガエ及びイネ科雑草、広葉雑草の発生を抑制できます(図2)。ロイヤント乳剤及びバスタ液剤は散布後18日程度、クロレートSLは散布後12日程度ナガエの再生を抑制できますが、ロイヤント乳剤の散布後は、散布後18日目頃から特にイネ科雑草の再生及び増加が目立つので注意が必要です。

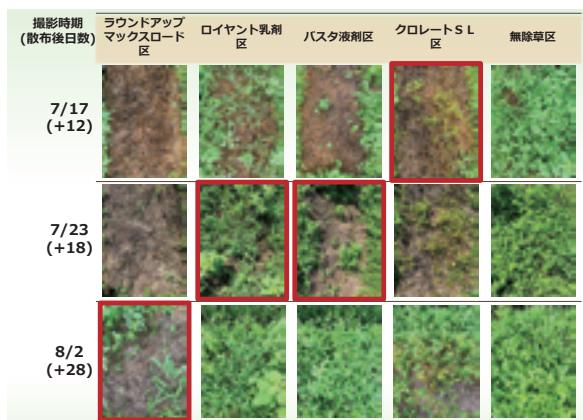


図2 水田畦畔における各除草剤の除草効果発現状況(2024年)

※図中の除草剤は2025年11月12日現在、「水田作物(水田畦畔)」または「水稻(水田畦畔)」に登録のある剤である。

※図中の太線囲みはナガエ除草効果発現期間の限界を示す。

5. 基本的な対策も忘れずに

水田におけるナガeturonogeitouの防除対策の基本は、「水田に入れない、水田から出さない、水田内で増やさない」ことです。まずは農業用水を介したナガeturonogeitou断片の水田への侵入を防ぐため、給水栓口にネットを設置しましょう(写真2)。また、畦畔のナガeturonogeitouの発生量を増やし、水田内へ拡散させる可能性があるため、刈り払いによる畦畔除草は避けてください。除草剤を散布する際も、除草剤の効果を十分發揮させるため、雑草の草丈30cm以下とし、薬液が雑草の茎葉に十分かかるように散布してください。なお、ナガeturonogeitouは多年生雑草のため、発生圃場では複数年の防除が必要です。



写真2 給水栓口のネット設置

4. JAグループ「共同購入」の取り組みについて

全農茨城県本部 農機営農支援部 農業機械課

JA全農では、生産者の所得増大に向けた事業改革の一環として、農業機械の「共同購入」に取り組んでいます。生産者が必要とする機能に絞り、一括発注を行うことで、メーカーの製造・流通の効率化を図り、生産者の購入価格の引き下げを実現しています。

第1弾の大型トラクター「YT357JZ」(製造元:ヤンマーアグリ株式会社)では、60馬力帯ではパワーにゆとりがあるエンジンを搭載し、標準的な馬力帯のトラクターと比べて約2割の価格引き下げを実現し、茨城県は全国第2位の販売実績となりました。

続く第2弾の中型トラクター「SL33L」(製造元:株式会社クボタ)では、「ノークラッチ変速」や「長時間作業可能な燃料タンク」など、使いやすさを追求した仕様で、県内JAと連携して取り組んだ結果、茨城県は全国第1位の販売実績を収めました。

そして第3弾となる今回は、2024年1月からコンバイン「YH448AEJU」(製造元:ヤンマーアグリ株式会社)の取り組みを開始し、茨城県では3年間で60台を取り組む計画をし、2025年9月末時点で、茨城県内でJAを通じて受注された台数は、45台以上となっております。

コンバインの仕様は、7,000名以上の稲作生産者へ必要とする機能・装備のアンケート調査を実施し、そこで得た生産現場の声を踏まえ、国内農機メーカーへ開発要求を行ったものです。必要な機能を厳選し、価格を抑えながらも、機体を水平に保つ「車体水平制御」や、水田作業でも滑らかな旋回と安定した直進ができる「常時駆動方式(FDS)」など、作業性に優れた機能を標準装備として採用しました。メーカー希望小売価格は670万円(税別)で、現行の4条刈り50馬力クラスのコンバインと比較し、100万円程度の価格引き下げを実現しています。

JA全農いばらきでは、こうした価格低減の取り組みに加えて、修理やアフターサービス体制の充実を進めることで、機械の長期利用による生産コスト削減を目指し、生産者の所得向上に取り組んでいきます。

共同購入第3弾 生産者&JA

共同購入コンバイン 誕生!!

全国7千名
以上の
稲作生産者の
声を反映

式
YH448AEJU
メー
670万円(税別)

4条刈り
51.5馬力
48.4馬力

主な機能

- 車体水平制御
機体が左右に傾いても水平に保つ
- 常時駆動方式(FDS)
水田作業でもなめらかな旋回と
安定した直進ができる
- 自動ごみ深さ制御
(オーフ-吸排)
- 刈取ホットトラクタ
・機械が運転するときに、運転操作を減らす
- 手ごみ安全装置
・オーフセシル
(エンジン回転自動制御)
- 無給油で省エネ1日作業
(おおよその時間と燃料)
が
おこなえる燃料タンク(43L)

JAグループからのお願い
注文いただいから納品まで4ヶ月程度かかります。
お問い合わせ下さいましません。
令和6年1月までにご注文をお願いします。

JAグループ 全農

JAグループは生産者の需要を切りとり、生産を行なうことで、生産者へ価値を還します。

主要諸元	
機体	格納・型式 YH448AEJU(製造元:ヤンマーアグリ株式会社)
	全長(mm)カッタ付 4070
	全幅(mm) 1895
	全高(mm) 2050
	機体質量(kg)カッタ付 2445
エンジン	型式名 4TNV86CT-MRC5
	種類 水冷4サイクル4気筒直形ディーゼルターボ
	総排気量(L) 2.091
	出力(PS) 51.5/2600rpm(グロ)・48.4/2600rpm(ネット)
	燃料タンク容量(L) 43
クローラ	幅×排距(mm) 450×1570
	中心距離(mm) 1035
	平均接地圧(kg/cm ²) 0.173
走行部	変速方式 HST無段変速
	変速段数(段) 前後無段×前進3段
	駆動方式 FDS(フルタイムドライブ・システム)
	走行速度 前進(m/s) (低速)0~0.75、(標準)0~1.40、(走行)0~2.60
	走行速度 後退(m/s) (低速)0~0.65、(標準)0~1.18、(走行)0~2.09
刈取部	刈取条件(条) 4
	ディヤド先端間隔(刈幅)(mm) 1460~1510
	刈取装置形式 往復動式(シングル)
	刀幅(mm) 1450
	刈取範囲(mm) 車速回数+3倍L-2倍
	こぎきさ調節方式 電動モータ式
脱ごく選別部	脱ごく方式 下下結合方式
	ごく幅(mm) 径×幅(mm)、回転速度(rpm) 420×810、520
	2番選別機 径×幅(mm)、回転速度(rpm) 170×236、1600(底やカロタ)
	搬動装置 棚×長さ(mm) 600×1353
こく粒処理部	搬ごく処理方式 クレンチング・オーフ排出
	ダスト容量(L) 1000
	オガ容量(mm) 3600
排らん処理装置	マルチカッター
運転免許	大型特待(農耕用)
オプション設定	・防塵カバー・作業灯(こぎき)・オガ先端 ・無線オーフリモコン・種子キット

5. がんばる種子生産者！



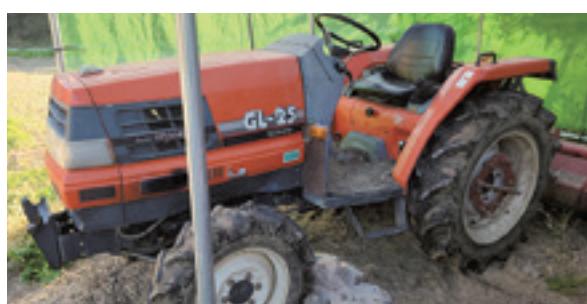
常陸農業協同組合 太田地区種子生産部会
梶間 郷士さん

◆ 経 営 規 模

- ・種子そば（常陸秋そば） 2 ha
- ・一般そば（常陸秋そば） 6 ha

◆ 主 な 使 用 機 械

- ・トラクター 3台
- ・けん引式播種機 3台
- ・自走式ハンマーナイフモア 1台
- ・フレールモア 1台
- ・管理機 3台



トラクター

◆ 品 質 向 上 の 取 組

堆肥を中心とした土づくりを行い、持続可能なそばづくりを心がけています。また、近年の高温化に対応するため、播種時期を8月下旬に変更しています。

◆ 栽 培 管 理

湿害対策として、明渠、暗渠排水を施しています。条間を60cmとして、中耕することで雑草抑制と倒伏防止に努めています。

◆ 今 後 の 抱 負

耕作放棄となった畠を開拓することから始まったそばづくりです。その後、後継者不在の農家から耕作依頼が増え、8haもの畠を預かることになりました。目標は地域の不耕作地をつくらない・赤字にならない・無理な労働をしない、そして、常陸秋そばの伝統を引き継ぎ、地域の矜持を繋ぐことです。土づくりに力を入れ、優良なそば種子生産に努めています。



トラクター

6. 穀物改良部ニュース

(1) 令和7年産水陸稻種子審査・検査標準見本品作製会を開催

10月3日（金）、当公社で令和7年産の水陸稻種子審査・検査標準見本品作製会が開催され、県関係機関及び各JA職員等18名が参加しました。

今年は、コシヒカリ、にじのきらめき、マンゲツモチの3品種の標準見本品を作製しました。

作製にあたり、茨城県農産物検査協議会の指導による注意点等に留意しながら、農産物検査員を中心に、参加者全員で原料から見本となる種子の選別作業を行いました。

各種子場JAでは、種子生産者が種子センター

に持ち込んだ原料を、今回作製した検査標準見本品を基準に機械調製を行い、生産物審査及び農産物検査に合格したものを一般栽培用の種子として供給します。



(2) 令和8年播種用麦類種子生産委託計画を承認

10月9日（木）、当公社にて令和8年播種用麦類種子生産委託会議が開催され、各種子場JA及び関係機関等の関係者で協議を行い、生産委託計画が承認されました。

県産地振興課が定めた令和8年播種用麦類採

種計画は、品種ごとに前年並または減産となっており、麦類全体では前年計画から36トンの減少となりました。

当公社では、これに県外からの受託、在庫数量、種子場の生産状況等を勘案し、各種子場JAへの委託計画を決定しました。

品種	計画面積及び数量	令和8年播種用麦類種子生産委託計画（種子場農協別）												転用 数量 (kg)	
		水戸		やまと		水郷つくば		つくば市		北つくば（結城）		合計			
		面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)	面積 (ha)	数量 (kg)		
小麦	さとのそら	106	265,000	16	39,000	24	61,000			16	40,500	50	124,500	106	265,000
	きぬの波	15	30,300			15	30,300							15	30,300
	ゆめかおり	10	24,300									10	24,300	10	24,300
	計	131	319,600	16	39,000	39	91,300			16	40,500	60	148,800	131	319,600
六条大麦	カシマムギ	12	18,000			5	7,700	7	10,300					12	18,000
	カシマゴール	24	43,000	14	24,300	10	18,700							24	43,000
	計	36	61,000	14	24,300	15	26,400	7	10,300					36	61,000
二条大麦（ミカモゴールデン）	27	57,000										27	57,000	27	57,000
はだか麦（キラリモチ）	8	12,000											0	0	12,000
合計	202	449,600	30	63,300	54	117,700	7	10,300	16	40,500	87	205,800	194	437,600	12,000

(3) 令和7年産水稻種子調製技術検討会を開催

10月22日（水）、茨城県採種部会協議会（会長：谷田部貞雄氏）主催「令和7年産水稻種子調製技術検討会」がJAつくば市採種部会の協力の下、JAつくば市種子センターで開催され、県内水稻採種関係者19名が参加しました。

最初に、種子センターの調製施設の見学を行い、工程順に調製機械を確認しながら、作業時の留意

点についてJAつくば市・塙田氏から説明を受けました。参加者からは、共通の課題として、調製機械の老朽化が進んでおり、修繕費に多額の経費を要しているとの意見がありました。

次に、各種子場から持ち寄ったサンプルを確認し、今年の原料の傾向と調製時の留意点について意見交換を行いました。

